

俳人協會の報

1971年
8月
No. 37

第十回全国俳句大会

——十周年を記念して盛大に開催——

俳人協会主催、朝日新聞社後援による全国俳句大会は昭和四十六年五月二十二日（土）東京・朝日新聞社講堂において行なわれた。昭和三十六年、伝統俳句の基盤に立つ俳壇各結社が集って設立された俳人協会はその後会員の増加、事業内容の充実と共に年々発展の一途をたどり今年めでたく十周年を迎えた。協会では「十周年記念事業委員会」を設け、今日の俳句大会もその事業の一環として開催されたものである。

これまで日曜日に開かれて居たが今回は諸般の事情で土曜開催ということで参加者の出足が心配されたが、いつもよりやや遅れ勝ちながら午後一時には六百名を越える参加者を得る盛会となった。受

付、庶務、接待、句会係等々大会運営のそれぞれの係も各結社会員の協力を得て手際良く処理されて行く。その和やかさ、スムーズさも十年の歳月のもたらしたよろしさと言えるかも知れない。

十二時半の定刻きっかり、鷹羽狩行氏司会のもとに開会。まず、皆吉爽雨氏の開会の挨拶、『五月らしい太陽と風に恵まれて十周年大会開催日にふさわしい好日となったことは同慶に堪えない。日本人が作りつづけて来た俳句の伝統をどこまでも守り抜いてゆく上で俳句を正しく発展させてゆく、これが俳人協会の基盤である。同じ立場に立つ結社が小さな結社意識を越え、然もお互の立場を尊重し合うという大調和の中で切磋琢磨すると

いう見事な姿を実現出来た事は協会十年の歩みの大きな業績である。今後ともますます会員各位の協力を願う次第である



る。』一語、一語かみしめるように熱意のこもった挨拶であった。

続いて、秋元不死男幹事長が起って大会募集句の審査過程を説明。

『俳人協会主催の全国俳句大会は規模、内容において最も大きな大会である。今回の応募句数は一万一千九百七十句（応募人員五千九百八十五名）というこれまでの最高記録となった。これを大野林火、皆吉爽雨、岸風三桜、能村登四郎、石川桂郎、安住教、秋元不死男計七名が二日にわたり予選を行なった結果、全句数の十五パーセント、即ち一千八百三十一句を選び別掲の二十九名の選者に渡して特選三句、入選二十句の選出を依頼した。選者の特選を二点、入選を一点として集計し高得点者よりそれぞれの賞を決定した。』と説明のあと協会の事業報告として「大阪、福岡、名古屋等々で開催予定されている地方大会へも会員の積極的な参加を希望する。又夏季講座開設、色紙頒布会、また俳人会館建設など有意義な事業内容の充実を計りたい。』と述べた。ついで記念講演。

水原会長は「十年の回顧」と題して昭和三十六年末、協会設立当時の模様から翌三十七年会長に就任されるまでの経過を話されたあと、第一回大会の折の講演「俳句

真偽の説」また、第二回大会の折の「主張の対立」の講演内容、更にそれに関連しての池内たけし、鈴木花蓑氏等々のたのしい想出話に移り会場は明るい笑いつつまれる。軽妙な話術で然も鋭く俳壇のあり方、若い人への希望を説いて聴衆の心を完全に掴んでしまう。

ついで大岡昇平氏の「文芸雑感」の講演に移る。フランス生まれの作家プロスペル・メリメの一八二九年の作品「マテオ・フルコネ」をとりあげて実話と創作とのつながりについて話される。流暢な言葉で語られるフランス文学の世界に会場は陶然と聴き入っている。この間別室において当日募集句の整理、選考が進んでいる。

小憩の後、まず大会募集句について富安風生・山口青邨・大野村火・平畑静塔・中村草田男氏等から講評がある。静塔氏は「前回、雑流しの句が好評であった。すると今回雑流しの句が多い。このように素材的に流行を追うような作句態度はいけない。」と説き、草田男氏は「最近の句にはムード、いわゆるフィリಂಗ俳句が大変に多い。そうではなくてもっと「きつかり」とした句を作るように望む。」とそれぞれ鋭く指摘された。

このあと、朝日新聞社賞、全国俳句大会賞の授賞者四氏に対し水原会長に代り中村草田男氏より賞状・賞品の授与があった。カメラマンの岸田稚魚氏が盛んにシャッターを切る。授賞者各氏の姿が喜

びに弾んでいるように見える。

つづいて当日募集句(五百七十一句)の選者である上田五千石、有働亨、加倉井秋を、木村蕪城、野沢節子、細見綾子氏等を代表して野沢氏から各選者の特選句が発表された。

終って安住敦氏より「来年度は皆さんの力でさらに盛んな会にして欲しい。」旨の閉会の挨拶があり、割れるような拍手のうちに第十回全国俳句大会はその全日程を終了して午後四時三十分成功裡にその幕を閉じた。(岡本 眸)

〔選者〕

- 水原秋桜子、阿波野青畝、富安 風生、野村 喜舟、山口 誓子、山口 青邨、秋元不死男、沢木 欣一、石川 桂郎、中村 汀女、星野 立子、能村登四郎、加倉井秋を、中村草田男、後藤 夜半、大橋桜坡子、福田 蓼汀、安住 敦、米沢吾亦紅、橋本 鶏二、遠藤 梧逸、友塚 友二、岸 風三樓、皆吉 爽雨、角川 源義、佐野まもる、香西 照雄、大野 林火、平畑 静塔

(順不同)

大会当日募集句特選

(順不同)

八重桜夫の門標そのままに
小林 春

加倉井秋を選

筥の出る前の藪きれいにす
金子 青水

賄女や五月の水を荒使ひ

西村 素女

山藪のみどりの濃くて虹ながき

白岩てい子

野沢 節子選

山藪のみどりの濃くて虹ながき

白岩てい子

暗がりに月日を忘れ蝮酒

原 敬正

梅雨晴の滝は翼をひろげ落つ

藤原たかを

上田五千石選

電柱に風音母の日なりけり

村田 充啓

肩の荷をこらえて行けば亀鳴けり

栗原 松子

なめくぢの苔をわたりて形あり

中村 将晴

有働 亨選

パイプに押えて髪切虫泣かす

守屋 霜甫

何時までの老後干潟のひろがりて

三浦青杉子

小川 春

金子 青水

西村 素女

白岩てい子

木村 蕪城選

汐干舟少年立ちて橋くぐる

堀内 六風

夕まけて一筋町や苗木市

日向野遊糸

セルを裁つ感触いつも父のもの

山田 諒子

細見 綾子選

減びたる塩田卯浪の音通ふ

溝部 節子

山藪のみどりの濃くて虹ながき

白岩てい子

万緑の幾谿鳴らし全車輛

宇治 春壺

大会賞受賞作品

受賞の感想

朝日新聞社賞

雪国を出て出稼ぎの雪に逢ふ

堀口 勇治



感想 受賞の報を真ッ先に慈父とも仰ぐ師に電話すると「よかったなあ」と一とこと、俳句のように短かい。

小さい地方の結社ながら、本大会へ私で七人目の受賞である。俳歴の浅い私は師のすすめで、恐る恐る始めて投句したのが、全く望外の光栄で、育てて下さった師と先輩に報いることが出来たことが嬉しい。

略歴 終戦後中国より引揚（会社員）

後、ネオン電飾工事店経営、五年前に「けいてき俳句会」に入り現在に至る。

和歌山市湊二三八。本名。五四歳。

全国俳句大会賞

あぢさゝるや水をゆたかに手漉紙

鷹野 清子



感想 この度は思いがけなく受賞のお知らせを賜り未だ信じ難く、唯々感激に胸のふくらむ思いでございます。今後もこの榮譽を心にきざみ、水原秋桜子先生の御薫陶の許に一層励んでまいりたいと思います。

略歴 明治四十年生、昭和三十年頃より作句を始め、「馬酔木」に入会し、爾来水原秋桜子先生に御指導を仰ぎ、現在に至る。昭和四十六年同誌同人となる。東京都杉並区西荻南一ノ一四ノ九

全国俳句大会賞

稲車馴れたる道は灯を入れず

梅田 康人



感想 今回全国俳句大会賞受賞内定の

報に接し、全く夢の如く感激し、只々茫然と幸福感にひたるのみです。これ偏に三師の御指導の賜と深く感謝致します。

殊に夕爾師は、今日の栄を在天にてさぞかし喜んで下さっていることと存じます。向後、益々精進をつづける覚悟です。

略歴 昭和三十三年二月木下夕爾師に入門引続き四月「春燈」久保田万太郎師に入門。両師亡き後、安住敦師の下に御指導を受け現在に至る。

広島県福山市御幸町中津原六三六

全国俳句大会賞

火にも音火にも匂ひやお水取

後藤 綾子



感想 あまり大きな欲びに慣れないものにとって、この度の受賞は何かアクションメントのような驚きが先行して、その日子定している九州旅行と受賞式と、どちらに行こうかと人に相談する始末で、当日九州から空路会場へ駆けつけようと心が決って、やっと落ちつきました。皆々様の数知れぬ御恩恵。有難うございました。

略歴 大正二年大阪市に生る。東洋女子歯科医専卒。医博。現住所にて歯科医

院開業。昭和三十五年俳句開始。現在

「菜燬火」同人。吹田市千里山西五丁目二十二ノ二

全国俳句大会賞

負け鶏を抱きて大きな手なりけり

日向野遊系



感想・略歴 昭和十一年名古屋屋在中、巖祭系の地方誌「若葉」に初投句、戦中加藤かけい主宰「巖」を経て「馬酔木」を識る。戦後「野火」「馬酔木」を経て「鶴」に入会、酒販業勤務の繁忙に欠詠がち乍らも現在に至る。石田波郷先生御健在の折稲毛の「鶴」鍛錬会に参加。遠来初顔の故を持って波郷先生の隣に着席、三句入選の栄を得た。昨年「風土」の谷川鍛錬会に初参加、桂郎賞を拝受した。本日受賞の通知を受けたが、その時と同様、貧しい句歴の中の面映い一日であった。

古河市南長谷一八三ノ三。本名良一、大正五年古河市に生る。

十年の回顧

水原 秋桜子
みず はら しゆうおうし

十周年の記念大会というので、何か回顧談をするのがよろしかろうというお話でございました。そこで、ごくはじめの創立時代の思い出とあわせて、現時点における私の感想を申し上げてみるつもりでございます。

このごろは、協会の会報が発行されておりますので、新しい方も近ごろのことはよくご存じかと思いますが、創立当時ということになりますと、記憶のほうから申ししても、霞のかかり始めることでございます。霞のかかり始めることしかと憶えておりません。みんなに聞いてみましても諸説ふんぶんとしておるような状態でございます。なるべく記憶を呼び起こして、正確を期してお話をするつもりでございます。

あれは昭和三十六年の十二月の下旬、もう正月が間近いというころ、俳壇のことに付いて大事な相談があるから、飯田橋の大松閣まで来てほしいということでございます。寒い晩であったと憶えて

て、結局伝統俳句をしかと守らないほうの作品が賞を得ることに決定した。そのときに、よほどの激論がたたかわされたと見えまして、その興奮がまだみんなの顔に残っていたかと思えます。

われわれはどうしてそんなことを知らないかと申しますと、現代俳句協会というのができましたときに、年齢の上の制限がございまして、山口誓子君が境に立ちまして、誓子君より下の人がみんな会員になる資格がある。誓子君よりも年上の人は、会員になる資格がないということでした。ですから飯田蛇笏大先輩をはじめ、富安風生さん、山口誓子君、阿波野青畝君、これはみんな会員になる資格がない。そのときに、おやおやこれはたいへんなご老体扱いをされて、そういうものかなと思ったわけでありますが、別に気にもしませんで、そんならこっちはこっちで老境にはいった俳句をつくって、いれればいいんだと思っただけであります。くやしきもありませんし、情ないなとも思わない。ただ正直な感想を申しますと「おやおやおや」ということでした。それに尽きるわけでございます。それでそれから、現代俳句協会にしましては何にも知りません。ただ毎年受賞する人の名前を見ただけで、よく冷静に伝統俳句を守る派と、そうでない派とが仲よくやっていくということ、俳壇にとつてたいへんいいんだけれども、私自身が嚴重に伝統俳句を守らないと承知できないたちで

ございますから、みんながうまく協調していくものだなと、いささか感心していただくものがございます。

ところが、そのときの話を聞きまして、どうしてもやっぱりこういうところにいくんじゃないかなと私は思いました。そして、みんなの顔が真剣であればあるほど、そのときの会員のすさまじさそしてみんながほんとに純粹な気持で、片方は伝統俳句でなくちゃいけない、片方はそうでなくともいい、この気合いが火花のように散り合って、こちらもまじめであつたし、向こうもまじめであつた。両方まじめであつたという、その気合いの激しさがまだ残っているのが、ありありと感じられるのでございます。それで、伝統俳句を守るほうでは、これでは今後やっていけないから、新しく協会をつくらうじゃないか、ついでにわれわれにみんな顧問になれ、こういう話でございました。

そのときに、誓子君より年上だった連中だれとだれがいましたか、これはまったく憶えておりません。おそらく私一人じゃなかったか、山口青邨君、富安さんがおられましたか……。私はもう伝統俳句を嚴重に守ることは大賛成なんです、即座に賛成いたしました。ほかの人もみんな賛成いたしました。

そこで俳人協会という名前はだれがつけたか、憶えておりませんが、成立すると同時に中村草田男君が会長でございま

おります。大松閣というのは大神宮の横にありません料亭であります。行ってみますと、そこに十七、八人の人が集まっております。すぐ感じましたことは、みんなが非常に興奮した顔つきをしておりまして、熱気が部屋にはらんでいいます。俳句の集まりとしてはめずらしいことで、こんなにみんなが興奮した顔をしているというのは……。ことに石田波郷君なんていう人は、あの人はどんなことがあつても驚かないタチで、ゆうゆうと迫まらない顔つきをしている人なのであります。その人が真っ先に興奮している。どういうんだらうと思つて座につきますと、やがて、だれだったか忘れましたが、この経緯を説明してくれました。

それは、少し前に現代俳句協会というものがある時ございましたが、そこで年度賞の選考委員会が開かれた。そのとき、結局二つの作品にしほられまして、一つは伝統俳句を正確に守っている、一つはそうでない、これが競り合いになりました

した。こちらの推薦した作品、つまり石川桂郎君の「佐渡行」という大作でございましたが、それに第一回の俳人協会賞を授与するということで、その場で授与式が行なわれた。ずいぶん早いこととございましたが、そういうことで俳人協会というものが成り立ちました。

それで、翌年の三月ごろに、私のところへ波郷君、大野林火君、秋元不死男君、安住敦君、そういう人だったと思いますが、見えまして、実は草田男さんが、健康の具合がどうも悪くて、会長を辞任された、これはどうも健康上の問題だからどうにも仕方がないので、その後任に私に会長になれるという話でありました。それはいけないんで、私は皆さんに協力して、顧問としてできるだけのことをする、そういう覚悟は十分ついているけれども、会長なんて柄じゃないし、そういうことは不適任だということは自分が重々承知しているから、これだけは困ると申しました。ところが、いや、どうしてもなれ。のっぴきさせぬ談判でございました。それじゃ仕方がないので、適当な人が見つかるまでなつてもいいけれども、とにかく先輩として相談する人があるから、その人に相談してからご返事を申し上げるといふんで、久保田万太郎さんと、富安風生さんと、直接ではあり

ませんでしたが、人を介して意見を聞きましたところが、お二人ともそれは大いに賛成だから、ぜひ就任しておやんなさい。

い。それじゃどうも仕方がないというんで、会長という柄ではないんでございませうが、なりました。

そのときの俳人協会の大会というものがどこであったんですか、これも実のところ憶えて、なんともかとも忘れませんが、相当若い人に聞いても、さア、どこでしたか……だれも憶えてない。何でも新橋のほうじゃなかったかしら、それとも有楽町の近くであったかしら、大通りからはずれたところの西洋料理屋ですか、大きなうちなんです、はいってみると、がらんとして、そこにテーブルが並べられて、五十人ぐらいの人が集まっておりましたかしら。そこで大会が開かれた憶えがございます。

ところが、それから間もなく、こんどは第一回の講演会を朝日講堂でやることになった。講師が二人で、一人は草野心平さん。もう一人は会長だからというので私がやることになった。「演題は何にしましょうか」というから、即座に「それは『俳句真偽の説』というものをやりましょう」……それでパタパタと決まっちゃった。というのは、前から「俳句真偽の説」というのを何かに書いてみようという気があったので、それじゃ書くより話そうといふことで決まっちゃったんです。

これは当時、俳句というものは写生を根本としなきゃならない。これは子視からの教えてございます。ところが写生写

生と申ししても、純粹の写生でないんで、頭の操作を加えた写生がだいぶ多くなつてきている。ところが大正時代から、ほんとに純粹写生である、こういうのがだれいようとなく定説になつていたようでありませう。

ところが、大正時代から俳句を始めましてずつときている私たちの経験によりまして、そうじゃないんで、逆であります。昭和のいまの時代のほうが、純粹な写生で、大正時代のほうが、少し頭の操作が加わっているんじゃないか。つまり嘘が加わっているんじゃないかと私は思つております。そういう話をしようと思つたのでございます。

大正時代の写生の模範生と言いますと、これは西山泊雲という人と、鈴木花篋の二人でございます。西山泊雲という人は丹波の人で、これは本当にまじめな作者でございます。私は知っているんですが、あまり話をしたことはありません。ましてや一緒に吟行したこともございません。この人の作りぶりはよくわからないのでありますが、もう一人、鈴木花篋という人は、泊雲以上の「写生の鬼」だといわれた人物でございます。この人はわれわれの師範格でありまして、この人にひっぱりまわされて、私が初心のころに、吟行に行かされました。この人の作りぶりは実に詳細に知っております。この作りぶりを考えますと、どうもこれが純粹の写生というわけにいきませ

んで、いろんなものが中にはいってきます。そういうことを私はしゃべりたかつたんで、その講演会でそれをしゃべりました。

少し実例をあげないとおわかりにならないと思つたから、その講演のときのことを思い出して申し上げますと、こんなようでございます。

あれは大正十三年の新年でございます。鈴木花篋、池内たけしさんと、東大俳句会の方が五、六人つきまして、武州の金沢というところにまいりました。

昼ご飯を食べて、展望台のぼりまして、金沢の入江が平瀾になっておりました。それが何かいたんでございまして、鶯がたくさんとんで来ております。数百羽という群です。あんなに鶯がいたのを見たことがございません。それが鳴き交わしながら入江を舞っている。どうも始末におえない。これはどう一句詠んできいか、手がかりが全くないんですから、ただぼんやり見ておりました。

それで、一休みして、花篋先生の俳句を拝見と申し出まして、一応見せてもらうと、「八景や冬鶯一羽舞えるのみ……」数百羽の鶯をことごとく抹殺して、たった一羽のみ……アツと思つたんですが、あれは名所、金沢八景というところがありまして、そこに鶯が一羽とんで、絵があつたと思つたんですが、あれから来たんだな、あれが頭にあるんで、いまの景

色の中にあれを入れたんだなと思いましたが。

それから大いに感服して、そのへん歩いて、帰りに返子のほうへ行きました。

一月のことでありますから、早く日が暮れまして、真っ暗になりました。返子に行くところ、たいへんな風になりました、西風がひどいところでありましたから、砂が吹きつけてきて、顔が痛いくらいです。

ところが、海岸に出てみますと、非常によく晴れておりますから、夜空に富士がよく浮かんで、これは実にみごとな景色でございます。あとは波の音ばかりで何にもない。こんなにも富士山がはつきり見えるのかと思いました。

そのときの花菱先生の句はといいますが、「浦富士は夜天に見えて（そこまではまさに写生です。あとがいけない）鳴く千鳥」千鳥なんか一つだって鳴いてやしない。またこんなことを書いていると書いて、驚いたんであります。

それから、こんどは五、六日たちまして、われわれが京都へ招待されたことがあります。京都の人の案内で、京都をまわりました。嵯峨野の藪の中です。昼間でも暗い、野々宮で、その晩は真っ暗な晩です。何にも見えない。あれが野々宮の社だといわれて、闇にすかして、それらしいものがあるんです。月も何にもない。それで夜ふけて宿屋に帰ってまいりました。どんな句ができたか、みんなできた句を見せようじゃないかというので

見せたところが、花菱の句が、「大比叡の表月夜や（京都に向かつて表ですからね。それが月に照らされている……月なんかありやあしませんが）猫の恋」というんです。正月もまだ六日くらいです。寒い晩だ。猫の恋なんてあろうはずがないんですね。これが写生の鬼だという。いかげんな鬼もあるものがございます。われわれ笑って帰ったのであります。

しかし、そうばかりも言えませんで、花菱の一番いい句で、多摩川の岸辺の遊船の中に一晩明かしまして、「早瀬波月溯り流されぬ」という句を作っております。これは本当の写生であります。

実にみごとな句だと思います。そういうものばかり作ってはいけません……本当の写生であると思えます。

これは、頭の中で途方もない句をつくり上げていくという、そういう傾向もたいぶあった人でございます。そういうのを知っておりますから、いま俳句のほうも、もっと写生から見れば純粋だという私の説であります。

この話をしたわけですが、みんな「ローワー」笑っていて、よく聞いてくれないらしい。こっちは少しも誇張してないのであります。

それですませまして、一時間二、三十分かかりましたかね。そして控え室に帰ってきまして、福田蓼汀という人が……この人はまじめな人でして、こわいく

らいまじめな人ですから、どうも今日の話は少しだけすぎたのでありますよ、もう少しまじめにしなきゃいけないと叱られたようなわけですよ。

そうしたら、石田波郷君が、「先生、きょうのアレは講演じゃありませんよ。あれは落語ですよ」……そのうちだれかが、「あなた喜雨亭というけれども、あれをやめて三遊亭としたいらいい」（笑）それで、この次の講演会のときは、はじめからひとつも笑わせない講演をしてやろうという気になりまして、こんどは「主張の対立」という題で、やはりこの講堂でございました。

これは、主張が対立しましたときに、芸術というものは、それで天下分け目の戦いが行なわれる、そのときに、本当の名作というものが残るんだという説でございます。ちょうど明治の末から大正の半ばにかけての画壇の渦巻き、文展と日本美術院、それから明治画展と二科会の主張の争いでもあります。

日本画は片方は、絵というものは精神というものを大事にするんだ、片方は、それよりは写生を本体として描く。洋画は、片方はアカデミックな流れを守っている、片方は、フランスの、外国から学びましたものを持ってきて教える。ですから、両方相入れない。非常に激しい、純粋な芸術の闘争が行なわれた。そのとき争いというものは、いまでも本当の名作として日本に残っております。当今

の回顧展なんかに出ている立派な絵というものは、みんなその時代の絵でございます。

そういう話をいたしました。ちょうど現代俳句協会のほうで、大きな「現代俳句協会句集」が出ました事で、こちらのほうでも、俳人協会の句集というものを出版するという話がだいぶ熱したときであります。これが本当の主張の戦いになりますと、世間の人が、どっちが勝っているか批判をしてくれる、たいへんいい機会でございますが、こちらは伝統俳句の芸術性を守っておりますが、向こうは、伝統俳句を守っている人とそうでない人とおりますから、これが残念ながら天下分け目の戦いにはならないのでございます。こうなれば、われわれ俳句作者として生きがいを感じた時代になったと思えますが、そうはなりません。結局、そのまま両方とも何回か回を重ねております。そういう、だれも笑わない話をいたしました。

その次の年でございますか、こんど大阪に行きましたときは、関西大会のはじめのときでございました。秋元君と、桂郎君と、私と、三人講演いたしました。

このときは、「芭蕉と蕪村」という題でいたしました。そのときは、まだ大阪とこっちのほうとの交流ができたとはいいますが、気持の上でそれほどしっくりもしてなかったように思います。だんだん回を重ねるにしがたが、たいへん

じっくりいたしました。いま大阪に行くのが楽しみになりました。

それから、この朝日講堂の会は、毎年こういふふうに皆さんお集まりくださいまして、盛況でございますし、去年は九州の大会で、あそこは各流派が錯雑しておりまして、むずかしいところでございますが、この大会もたいへんな盛況でございます。来年は名古屋でございます。先ほど幹事から申し上げましたように、いろいろの会合ごとく成功いたしました。どうしてこんなうまいいくんだらうと思うくらい、うまいっております。

しかし、これは考えてみるとそのはずなんでございまして、何かしようというときに、すぐ委員が決まりました、その委員が何回も何回も会合を重ねてやるほどの熱心さでございます。これほど熱心な、気持がよく合っている会合というのは、いまだかつて俳壇関係で私は出会ったことはございません。非常に理想的に行っております。ですから、私みたいに何にもしないものでも、会長という名前が保っていきけるわけなんでございます。

とりわけその中でも感心しております。たことが二つございます。それは毎年の俳人協会賞の選考委員の熱心さというものでございます。これは俳人協会賞の候補になります。下見の委員が熱心に調べまして、十冊ばかりの応募作品をあげます。そして本選を決める委員が仔細

所記

に検討します。その読み方は詳細をきわめておりますこと、たいへんなものです。選考会に行つてみますと、みんな一人一人意見をのべます。それが詳細をきわめまして、選考会は、三、四時間近くもかかります。それをそばで聞いておりまして、ぜんぜん飽きることがない。飽きることがないどころか、そのおかげで現俳壇の作風に精通できるというところでございます。

そして、票数がせり合つてまいりますと、投票なんかなしに決まればいいんですが、そうもまいりませんで、どっちにしようかという問題が起こりますと、票決ということになります。一度決まりました以上は、それについて何にもだれも言いません。あれは惜しかった、かわいそうだ、そういうことはちつとも言いませんで、そのままあっさり帰っちゃまう。そのあっさりするということは、つまりその場で思う存分のことを腹藏なく言った証拠なんでございます。何か心の中に残っていることがあれば、あれだけあっさりした態度はとれないと思えます。実にあっさりして気持がいい。こういう気持がいい選考会というものは、模範としていいだらうと思つて。

もう一つ感心しておりますのは、中堅層の問題です。横に各雑誌を貫きまして俳句会を結成しております。東京タワーの下で会合するので、「塔の会」というんだそうです。そこで句会をしまして、

所記

お互いのつくつた俳句を、忌憚なく検討し合っている会というところでございませう。会員諸君の顔ぶれを見て、私は、これは大丈夫だと太鼓判を押したわけでございます。こういうことも昔はなかったのであります。

たとえば一つの雑誌がございませうね。そこにわれわれが行くといたしますと、その主な同人たちの中には、その雑誌から離れた人もありますが、自分一人独立いたしますね。その子雑誌が六つや七つございませう。そういうのも見ちゃいけない。昔は、見ていますと、こいつはあの雑誌を見ている、謀叛でも始まるんじゃないかという噂が流れ始めまして……そういうことをまた言うのがいたんです。そういう状態だった。そういうところには、もう批評なんていうのは全くありません。したがって進歩もないと思つて。私は、いままでの俳壇で一番いけないことは、批評がなかったということだと思つて。お互いの批評というのには全くない。批評しちやいけないのであります。だからその雑誌の選者の選句を、少しでもいけないうと、

たちまちこれはひどいことになるのであります。みんなからとちめられる。そういうのがいけないうで、ちゃんと正しい批評は正しい批評をする。ほかのほうでは、ほかの俳句に対しては自由でありますから、俳句と名づけられるもの、いろんな雑誌を読んで、それに対する批評

をして、お互いに批評を交換するところにお互いの進歩があると思つております。ですから、そういうことも非常によくなりまして、横の連絡がとれまして、俳句会なるものが催されております。

こんなことはわけないじゃないか、一、二カ月一緒にやつていればできることじゃないかとおっしゃいませうが、なかなかそうはいかないんで、十年かかってはじめてこういうことができる。十年かかってそういう気分になったということが、また大事なことであります。いきなり俳人協会というものができて、そういう会ができました。私は信用いたしません。十年という長い年月がたつて、お互いの気心がわかつた上で、そういう会ができた。これは本当に意義あることだと思つて。たいへんいいことだと考えております。

さらに、このごろは、女流の作家もそういう会をつくりまして、お互いに意見交換が始まった。これはたいへん結構なことだと思つて。そうすれば、女流と男流がそこに一緒に会を開くこともございませうし、あるいはお互いに刺激することがございまして、ますます勉強も熾烈になると思つてございませう。どうぞこういう会合の方々がよく勉強なさいまして、伝統俳句のために、新しい、みごとな花を咲かせていただくように願つている次第でございます。(拍手)

(文責在記者)

文芸雑感

大岡昇平

俳句の方で話をするのははじめて
 なんです、どういふ話をしたらいいのかわ
 からないんですが、俳句と私小説との関
 連というようなことをしゃべろうかと角
 川さんに聞いたたら、俳句のことはもう皆
 さんご承知なんだから、なるべくそうい
 うことはいわないほうがいいと言うので
 す。私も、そのほうが恥じをかかないで
 すみますから、小説のほうのことで、何
 かご参考になることを申し上げることに
 いたします。

もっとも俳句のことをしゃべるのは禁
 じられているんですけども、本当は、
 私どもの世代は、わりあいには、俳句を自
 分で書くわけじゃないんですが、昭和十
 年代でございますして、交流のあった時代
 ではないかと思えます。いまはどうか存
 じませんけれども、水原先生、あるいは
 誓子、石田波郷なんかも読みますけれど
 も、「鱗雲人に告ぐべきことならず」、こ
 ういふ句をわりあいに憶えているんで
 す。

われわれが小説をやるのは、こうい
 うふうに口でいえないことを、あとに余韻
 を残して、何かあるということにも本当
 はならないんだらうと思うんで、かえっ
 てもったいぶったことをいうことになる
 んじゃないかと思えますけれども、どう
 もわれわれは、そういうほうの興味を持
 つような傾向があるわけでございます。
 つまり小説というのは、必ずしも口
 出していえることではないことでも、そ
 れを行動で表わす、あるいは動作で表わ
 すというようなことを写すというような
 のが、劇でもそうでありませうけれども、
 そっちのほうが商売の用具なわけであり
 ます。

今日ご参考までに皆さんに申し上げた
 いと思うのは、メリメの「マテネ・ファ
 ルコーネ」という小説がございます。一
 九二五年……だいたい昔の話でございます
 けれども、フランスの短編小説が、きち
 っとまとまった形となった。当時は、印
 刷される前に、サロンの習慣というもの

がありまして、人が集まる。同業者も集
 まったり、そこにきれいな婦人がいるら
 しいんですが、そういうところに寄って
 いくわけです。そういう習慣があつて、
 そこで読まれたらいいんです。読んだだ
 けで意味がよく通じなければならぬ。
 そうすると、どうしても簡潔になる。メ
 リメというのは、スタンダールの友人な
 んですけれども、スタンダールというの
 は、「赤と黒」とか、長い小説がうまい。
 「短編小説」というのはうまくないですけ
 れども、これなどもやはりサロンで読ま
 れたらいいんです。短編で書いて、それ
 をみんなが集まって読む。

当時は、雑誌、ジャーナリズムが発達
 していないので、そんなのききな習慣が
 あつた。読むよりはどんなに発表してし
 まう。読んだらお金をとられちゃって、
 作品に発表されちゃう恐れが出てくる：
 ……まさかそうでもないんでしようけれ
 ども、そういう傾向が出てきております。

「ファルコーネ」という小説は、そう
 いうふうにして読まれたんですけれど
 も、これは有名なコルシカの話でして、
 十歳の少年が出てくる。そこにおたずね
 者……というのは少し正確ではないんで
 すが、政治犯といかないまでも、今日で
 いうアウトローに当たるような、反社会
 的な存在になつて人間が逃げてきて

怪我をしている。憲兵に追いかけられて
 いる。助けてくれというので、一応干し
 草の山の中に隠してやる。そこに憲兵が

くるわけで、当然道がここで止まってい
 るから、ここににいるに違いない。その親
 父がファルコーネという名前なんです。
 それが近來の鉄砲撃ちの名人であり、ま
 た地主である。相当のボスでして、子供
 は、そんな人間は通らなかつたというん
 です。そこで、家探ししようとする。

「お父さんが何ていうかな。留守の間に
 家探しされたらたいへんじゃないか」と
 憲兵がいったりする。子供は、非常にこ
 ましやくれた子供で、そういう会話のや
 りとりがある。ところが、おどかしがき
 かないとわかつたんで、銀時計で子供を
 買収にかかるわけです。その誘惑に負け
 て、指で肩越しにワラの中をさす。そう
 いう裏切り行為をする子供なんです。

ファルコーネが帰ってきたまして、非常
 に怒つて、その息子を自分の手で直ちに
 射殺してしまふという話であります。

そういう裏切りに対する処罰と、それ
 からそういう子供は、自分の最愛の一人
 っ子であつても容赦しないという父親の
 姿を、短い、日本の四百字詰め原稿に
 すれば、二十枚ぐらいの中にうまくと
 められている。

子供が扱われておりますから、少年物
 語の中にも出てくる。またフランスの教
 科書にもよく載つておりますから、この
 話はわりあいご承知だらうと思ひます
 が、念のために申し上げます。

この小説は、表向きは非常に単純なも
 のになつていきますけれども、これはメリ

メがそう単純化したのではなくて、実話
がもとになってるわけです。その実話
のほうはもう少し複雑なわけなんです。
メリメの作品との関係におもしろい問題
がいろいろある。そういうことを簡単に
申し上げますと、からくりというものが
わかって、それも皆さんの俳句のほうに
ご参考になるかどうかわかりませんけれ
ども、小説はそういうふうにでき上がっ
ていくものだという例になろうかと思
います。

時間が延びておりますので、簡単に申
し上げますと、この話をメリメが発表し
たのは一八二九年ですけれども、コルシ
カの話なんです。コルシカというのは、
イタリヤから少しフランス寄りの、地中
海の島です。昔から、イタリヤ側からは
イタリヤ人に侵入される、アフリカのほ
うからも侵入される、スペインのほうか
らも侵入されるというふうに、日本の四
国の半分ぐらいの島なんで、非常に山が
多くて、工業的、農業的には価値はない
んですけれども、海軍の中継基地です
ね。お互いに攻撃し合うのにいいわけが
あるので、海賊の根城みたいに使われ
ていたわけです。

で、十八世紀の終りには、ちょうど北
イタリヤ半島の根本のところに、ジェノ
バという町がございますけれども、これ
がちょうどベニスとか、ベネチアと同じ
ように、商業的協和国になっていて、相
当地中海の貿易、むしろ海賊もやるわけ

なんですけれども、敵対国になっていれ
ば、相手の船は船ごと沈めてしまうわけ
ですから、海賊行為に近いんですが、そ
れと同じようなことをやって、一つの国
になってる。しかしだんだんヨーロッパ
が、フランスのルイ十四世、あるいは
イギリスもそれぞれ民族的に大国になっ
ております。強大になってくるんで、ル
ネッサンス時代の商業的な協和国がつぶ
されていく。あるいは勢力は衰えてい
く。で、コルシカが持てなくなってくる
んで、その鎮庄というか、しょっちゅう
外国から来ているものですから、人口
は少ないんですけれども、常に反乱が絶
えないわけです。それで手をやきまし
て、フランスに譲ってしまう。これは一
七六八年、いまから二百年前のことにな
るんです。そのころの話です。

コルシカが譲り渡されるのは一七六八
年ですけれども、その前から、実質的に
フランスの軍隊が援軍として派遣されて
いて、コルシカに駐屯して、相当に反乱
軍の鎮庄に当たっている。そういう段階
で、脱走兵が出るわけですね。この話が
二つからみます。

二つは、同じ話なんですけれども、脱
走兵が二組ある。一つは一人なんです。
こういうところもちょっと関係があるん
ですが、その一つの話は、脱走兵が一人
のほうは、それ自身コルシカ人であっ
て、フランスの軍隊に徴用される。それ
をいやがって脱走してしまふ。そして山

の中に隠れる。コルシカの山の中とい
ますと、焼け跡耕作が行なわれておりま
して、そのあとにものを蒔くわけです
ね。そのあと林がこんがらがっている。
そこにはいったらなかなか捕まらない。
またその山の中は、羊飼いなにかいまし
て、そこに行けばだいたいバターやチー
ズをもらえる。逃げ込んだらそこで生き
られるというような状態になっているわ
けです。そのことは別に書いておりま
す。

そうすると、メリメの小説では、その
部落の大きな地主だろうと思えますけれ
ども、どうもここじゃ危ないから、山
中に息子のうちがあるから、そこに隠れ
ているといつて、そこにつれていく。と
ころが、探索する兵隊がくると、その息
子が裏切ってしまう。なぜ裏切ったかわ
かるかといつて、ふだん持ちなれな
い大量のお金を持っているので、親父が
見つけて、問い詰めて白状させる。そし
て自分の手で、アヤッチョというコルシ
カの首都で、メリメの小説に出てくるの
とは違いますが、城壁のそばにつ
れていって、コルシカ人が礼を重んじる
のはこのとおりだといつて、そこで殺
す。その褒美にもらったという金を死体
の上に投げつける。これがほぼメリメの
小説と同じになっております。

ところが、もう一つの話というのは、
脱走兵が二人になっているんですが、脱
走した兵隊は、その自分の息子に頼むと

いう話の段階が抜けているわけです。と
にかく山へ逃げ込んで隠れてしまふ。そ
うすると、兵隊が追っかけてくるので、
岩のほうに隠れる。そこへたまたま羊飼
いがいて、その様子を見ているわけです
ね。通りかかった兵隊が、このへんにこ
ういふ人間は見なかったかという、何
にも答えなくて、岩のほうを目で知らせ
るんです。そこで探してみると、はたし
ていた。褒美にまた金をくれる。先に褒
美を提供して教えるか、あるいはただ教
えてくれたので褒美をやるのか、話が
いづつか違うんですけれども、とにかく褒
美をやる。そうすると、すっかりうれし
くなっちゃう。そのときに言葉でいわな
いのは、つまり裏切るといふことを大っ
びらにしたいくないんですね。

それとなく知らせるという形。それは
民族学のほうでもいろんなタイプがある
らしくて、「イソップ物語」にも、ギリ
シャの話にも、そういう型がある。とに
かく言葉を出さないで、動作か目で知ら
せるというのが、裏切りの根本的な形で
あります。

で、この話が前の話と違ってくるの
は、父親が、子供（そんな年端のいかな
い子供ではないんですが）の罪を知って
親族会議を招集するんですね。そして、
これが罪に当たるかどうか、この息子を
どうするかといふことを親類に話す。
この場合に、なぜ罪になるかというこ
となんですけれども、これはフランス語

では「オスビタリテイ」というんですがつまり英語では、何でも手紙のおしまいに、「この間のおもてなしありがとう」というようなお札の決まり文句になるんで、客に行ったときに非常に歓迎してくれたり、ご馳走してくれる、主人側からいえばご馳走するのがふつうの意味なんですけれども、第一義として、お客をただで泊めるということがあるわけですね。ホスピタルと同じ語源なんですけれども、われわれのほうは病院ですが、そのもの意味は、子供や難民なんかを救ったのを、オスビタルといったらいいんです。それと同じ精神でありまして、ローマ時代からあるわけです。あの時代から、一種の法律というか、掟として、慣習法として成立している。ある地区から、遠い地区へ旅人が行ったときには、

どこのうちにでもはいつて泊めてもらう。そうすると、B地区からA地区へ人が来たときに、泊めてやるという掟があるわけですね。これはローマにもあり、ギリシャにもある。あるいはアブラハムというのは、非常に友情に富んだ人だという文句もあるんで、旧約時代にもあったわけです。フランスの十八世紀、十九世紀になると、そういう場所もなくなっているんですけども、コルシカはそういうふうな山の島でして、統一政権というものはない。共同体同士のお互いのむすびつきでやっていますから、その慣習が成り立っている。そして、これが外

国に支配されますと、政治犯や反乱軍などを必ず匿うというふうには、オスビタリテイが適用されて、犯人というものを匿うのがコルシカのふつうの意味の中にあつたらしいんですね。

その、オスビタリテイの法則に反しているわけですね。匿ってやれといつて匿ってやった男と、個人との対立。その義務だけではなく、一たん自分のうちへ入れて匿ってやったということは、自分のうちへ入れてやったということですよ。これを裏切るといふことは、つまりその裏切った息子だけの不名誉なことではなくて、そのうち全体の不名誉になるわけです。ですから、その父親は、その息子を自分で処罰しなければならぬということになるわけです。

脱走兵の話に戻しますと、そこで親族会議を開催する。そしてメリメの話では、すぐその場で殺してしまふんですけれども、そうではなくて、町へ行つて、その司令官と父親が交渉するわけです。その二人の捕えた兵隊の命を助けてやってくれないかと頼むわけです。もし助けてもらえれば、自分の息子の命も、村の人たちから助けてもらえるかもしれない。この場合、父親はファルコーネのよゆうな父親ではなくて、非常に人間的なふつうの父親になっているわけです。ひざまずいて嘆願するわけですけれども、軍の司令官というものは軍律がありますから、いまと違ひまして……。いまは、脱

走しても死刑ではないでしょう。当時、そういう植民地をもってやっているんですから、逃げられたらたまらないわけです。銃殺になるわけですね。それは許すわけにいかないといつて、断わられてしまふ。そうすると父親は帰ってきて、息子を城壁の外に立たせる。そして、ちょうど城内で二人の脱走兵が銃殺されると同時に、息子も銃殺してしまふ。

この物語の意味は、司令官も頼まれたところで助けることはできない。片一方の父親も、村全体、あるいはコルシカ人としても、オスビタリテイという法則に反した者を、生かしておくことはできない。そういう義理と義理がそこでぶつかつて、同時に行なわれるという話があつたわけでありませう。

この二つの話を、メリメは一つにしたわけです。この短編小説になった段階で、どうして効果を上げているかという点、処罰するにしても、そのもの話では、親族の前で、自分は息子を殺すぞといつて殺すわけですが、メリメの小説の場合、母親が、「お父さん、何するんだ」といって、それを払いのけて、自分一人であつて行く。お祈りをしようといつて、お祈りをさせる。つまり父親の個人的な悲劇になっているわけです。この小説の前の段階で、十歳の子供、これは非常に悪賢い子供になっている。つまり裏切るということは悪だというふうには、オスビタリテイという言葉を使っています

けれども、社会的な意味が抜けてしまつて、子供の中にひそんでいる悪、父親のつらい気持というものにはばられていく。こういうことで、近代の小説というもののはだんだん来たわけですね。

短編小説で、メリメというのは、あと「コロンバ」「カルメン」という話で、大正時代は非常に人気があつた作家ですけれども、日本の小説家と認めてメリメを第一人者の小説家と認めていくかという点、そうでもない。メリメの友だちのスタンダールは、もっと広い視野に立つた、社会的な問題から考えていく。おそらくスタンダールほどの小説を取り扱つたら、メリメも純化しないで、おもしろい話、劇的な集中的な効果というものが犠牲になつたと思います。コルシカの背景とかなんかを、そのまま持ってきたのではないかと思います。だんだん小説というものは、メリメのような、集中的な効果を狙うものではなく、ドストエフスキー、トルストイというふうな、ロシアの小説というふうなもので、十九世紀の全体の潮流は、そういうふうに進んでいったわけでありませう。二十世紀になりますと、これが崩れてきているわけでありませう。

長々と話しましたけれども、題材がめんどろなものですから……。時間が参りましたのでやめますが、こういうふうな小説はつくられていくんだというお話を申し上げます。(拍手)

(文責在記者)